

Edited by Jason Goulah

『池田大作・言語と教育 (Daisaku Ikeda, Language and Education)』

富岡比呂子

本書は2014年4月に、アメリカのデポール大学に設立された「池田大作教育研究所」の所長を務めるジェイソン・グーラー准教授が編集した池田大作氏（以下、池田と記す）についての論文集である。同研究所は北米の大学・高等教育機関では池田の名前を冠する初の研究所となり、創価教育に対する学界の関心が、グローバルな広がりを増してきたことの証左といえよう。2012年4月にルートリッジ社が刊行する学術誌「言語学研究の批判的探究（Critical Inquiry in Language Studies）」で特集された、池田に関する論文を単行本化したものであり、7人の研究者の論文が収められている。平和活動家であり、幼稚園から大学院までの一貫教育機関の創作者としての池田の思想的背景や教育哲学に関する研究に加えて、彼が今までに出版してきたスピーチや提言などに見られる「言葉」に関する論考が中心となっている。

まえがき（Jason Goulah: Daisaku Ikeda and Language: An Introduction）「池田大作と言語」の冒頭部分では、池田は一般的な意味での言語学者や言語教育者ではなく、仏法者であり、14もの創価の名を冠する学校の創作者であり、平和活動家であり、著述家であると紹介されている。次に、池田の伝記を出生から現在まで示しながら、池田の言葉や語学に対する視点、特に語学習得の重要性について言及している。池田自身は、青年期に外国語の習得の機会にあまり恵まれなかったが、平和への志向性を考えたうえで、外国語を習得することの重要性を創価大学・創価学園の入学式のスピーチなどで数回にわたって訴えている。語学を学ぶことは、単にその国の言語だけではなく、その言語が発展してきた背景である、異なる文化・価値観・哲学への理解を深めることにもつながる。すなわち、言語習得は異文化交流のための必須の要件であり、人間尊重の精神や、差異を乗り越える寛容性の育成に有効であり、そのような広い意味での地球市民的な視座や精神性を培うことが、ひいては池田の志向する平和構築における原動力となると考えていたのではないかと、グーラー氏は指摘している。

アンドリュー・ゲバート氏（Andrew Gebert: Daisaku Ikeda and the Culture of Translation）は、「池田大作と翻訳の文化」で、池田の行う価値創造の一つのかたちとして、「翻訳の文化」をあげている。池田自身は母国語である日本語のみを用いて様々な著作を残しているが、彼は読者

として、また多くの他言語に翻訳されるテキストを生み出す人物として翻訳のプロセスに深く関わっている点を強調している。この論考は、池田の翻訳文化に対する志向性を、法華経をはじめ膨大な数の訳経を残した5世紀の訳経僧である鳩摩羅什を例に挙げながら検討しているという点で、非常にユニークな研究であるといえる。ゲバート氏は、池田の発言や著作・提言を翻訳することとは、単なる翻訳作業を超えて、普遍的な人道主義を基盤にした異文化間の交流を促進することにつながると結論している。

ゴンザロ・オベリロ氏 (Gonzalo Obelliro: Moral Cosmopolitan Perspective on Language) は、言語と市民性の問題を通して世界主義 (cosmopolitanism) の思想を検討しており、池田の世界市民教育の哲学を、現存する他の研究と比較対照させている点で興味深い。特に、池田が地球市民の要件として掲げる「智慧・勇気・慈悲」の3つの観点を仏法的視点から考察し、それらが現代の言語教育にいかに応用できるかについて論じている点は、池田思想と世界市民教育の問題に新しい視座を提供している。

グーラー氏 (Jason Goulah: Realizing Daisaku Ikeda's Educational Philosophy through Language Learning and Study Abroad: A Critical Instrumental Case Study) は、語学習得と海外留学の観点から池田の教育哲学を考察している。彼は、池田の英語に翻訳されたスピーチから「全体人間」の定義について言及している。さらに、創価教育の学校に学ぶ学生がどのように池田の哲学を「語学習得や海外への留学経験」を通して実現していくのかについて、民族誌的な手法を用いて検討している。

ノゾミ・イヌカイ氏 (Nozomi Inukai: Ikeda Research in China and Taiwan: Critical Analysis of the Chinese Language Literature) は、中国本土および台湾において出版されている池田の著作の批判的分析を行っており、今までの中国における池田研究についてのアーカイヴ調査としても貴重な論文である。イヌカイ氏は、池田の教育哲学の主要なテーマは、「社会のための教育」から「教育のための社会」への転換による「調和のための教育」と「道徳教育」にあるとし、生命尊重と人道主義がその根幹にあると強調している。加えて、現代の中国の教育における功利主義、物質主義、試験中心主義などの問題点を指摘したうえで、池田の主張する「人間教育」の意義について考察している。池田の哲学を儒教的価値と西洋的価値の2つの観点から考察している点で興味深い論考といえよう。

カズマ・ハタノ氏 (Kazuma Hatano: Daisaku Ikeda's Educational Philosophy in the Context of English Education Policy in Japan) は池田の教育哲学を日本の英語教育政策の観点から考察している。彼は、池田思想における「知識 (knowledge)」と「智慧 (wisdom)」について言及している。池田によると、「知識」は、それ自体が価値を持つものではなく、それがどの程度その人にとって意味があるのかによって価値が判断されるとしている。一方、「智慧」は「知識」を価値のあるものに変える能力であるとしており、価値を創造する力であるとしている。ハタノ氏は、池田の言語教育に対する志向性は、英語教育を推進することの価値を、単なる言語習得ではなく、言語習得を通して培われる生徒の精神性や人格、智慧の獲得にあると指摘しており、そ

れこそが現代の日本の英語教育政策に欠けているのではないかと分析している。

ジュリー・ナガシマ氏 (Julie Nagashima: Daisaku Ikeda's Philosophy of Soka Education in Practice: A Narrative Analysis of Culturally Specific Language) は、創価学園・創価大学の卒業生である2名の現職教員を対象にインタビューを行ったナラティブ調査の結果を提供している。ナラティブ分析の特徴の一つとして、回答者の語りや言葉そのものが分析対象とされることがあげられるが、本研究でも卒業生が創立者の池田や自身の受けた教育経験をどのような「言葉」でどのように「語る」のかが、一つの焦点となっている。インタビューでは、自身の受けた創価教育の哲学を、現在どのように現場の教育に教員として応用しているかについても検討されていた。創価教育を実践的側面、およびオーラルヒストリー的な側面から考察したという点で、価値があるといえよう。

本書の大きな特徴は、池田が生み出してきた「言葉」の持つ力や価値にフォーカスをして、それを道徳性、世界市民、翻訳、語学教育、中国語で語られる池田研究、英語教育政策、卒業生のナラティブ（言説）分析といったさまざまな観点から論じているところである。今まで池田の活動や業績について、彼の著作や提言を主な文献として考察されてきた研究はみられるが、「言葉」自体を研究対象とする点で、本書はその独自性を実に明解に示している。池田の言説が、彼の元を離れたときに、どのように後世に伝わっていくのかについても、創価教育の学校の卒業生の語る言葉や、中国をはじめとした他の言語で池田思想がどのような言葉を用いて語られているのかにもあらわれているといえよう。このような言葉、翻訳、語学教育という側面から池田思想を研究・考察した論文集は過去にも類を見ないものであり、本書の出版の意義はそこにあると考えられる。また、創価教育機関の設立の歴史とその思想を学術誌上で考察するという試みも注目に値するといえる。

本書は、創価教育について、その思想的背景や実際の学校設立の経緯など、基本的な情報を知りたいという海外の研究者のみならず、すでに創価教育の歴史や池田の思想についてもある程度の知識があり、伝記や評伝といった、一般的な人物研究の枠組みを越えた視点から池田大作という人物について検討したいという研究者にとっても、有用な一書となるであろう。創価教育を実践的な側面から考察する上でもぜひ一読をお勧めしたい。

(ルートリッジ社、2014年)